



Title	荒木俊夫教授の経歴と業績
Author(s)	田口, 晃; TAGUCHI, Akira
Citation	北大法学論集, 45(1-2), 227-236
Issue Date	1994-07-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15578
Type	other
File Information	45(1-2)_p227-236.pdf



荒木俊夫教授の経歴と業績

田 口 晃

昨夏、我々の驚きと嘆きをよそに、急逝された荒木俊夫教授の経歴と業績について、一とおり紹介するのがここでの課題なのだ、筆者はと言えば、一九七八年（昭和五十二年）荒木教授が北海学園大学から北大に移られてからの、比較的短い期間

小論の内容は、専ら一同僚としての十五年の交際の中での断片列記ということにならざるを得ないのであり、その点、予め読者の御海容をお願いしておくことにしたい。

の知友に過ぎず、又、広義の政治学専攻という点で共通とは言え、専門分化の著しい現状では、研究分野を異にすると云ってよく、教授の学問業績を論じるのに役不足であることに疑問の余地はない。それにも拘らず、あえてここに「経歴と業績」なる小論を立てるのは、何よりも故教授の厚情に報い、そのかけがえのない人為と俾れた研究業績とを江湖に知らしめる一助たりたいと思念するからにほかならない。いきおい、教授の業績と人物についての委細は、遺稿集や知人の追悼寄稿集に譲って、

一、
荒木俊夫教授は一九三七年（昭和十二年）三月二十三日、利尻町杵形に荒木健三、カノ夫妻の長男として生を受けられた。利尻小学校卒業後、札幌に出、市立向陵中学、道立西高等学校を経て、一九五五年（昭和三十年）北大法学部入学、そして大学卒業後は、小川晃一教授の指導の下、大学院修士課程及び助手の道を進んだ。一九六五年（昭和四十年）四月には北海学園大学法学部講師となり、その後助教、教授を経て一九八七年

(昭和五十三年) 四月から本学部教授になられ、昨年に至つて
いる。この間二つの大学で研究・教育・学内行政に活躍され、
一九八八年(昭和六十三年)からは北大の評議員を、さらに一
九九〇年(平成二年)から二年間は法学部長を勤められたこと
は、我々の記憶に新しいところである。そして昨一九九三年七
月二十八日、病の為五十六歳で永眠されたのであった。

荒木俊夫教授の学問的業績と言へば、その中心は、何と言つ
ても、政治意識調査と選挙の投票行動分析であろう。しかし、
今夏刊行予定の遺稿集にそうした主要業績が収録され、そこに、
相内俊一北海道教育大学助教授が、適切で懇切な解題を付して
下さることになつていたので、個別業績の学問的位置づけにつ
いてはそちらを参看頂くこととし、ここでは、遺稿集に採り上
げられぬ初期の研究に光をあてながら、教授の政治学研究の全
体の特質を、その方法的態度とかかわらしめつつ、まとめて見
ることにしたい。

荒木教授の研究の出発点が政治哲学及び政治思想史にあつた
ことは、意外とする向きもあるかも知れない。けれども、小川
晃一教授の指導下での最初のまとまった研究成果は『カルヴァ
ンの教会論』という紛れもない思想史研究であつた。今日、こ
の論文を読んで、新鮮な、少しも古くなつていないという印象

を受けるのは、煩瑣な文献学的考証の細道に迷ひこまぬ論理的
骨格のすつきりした論述のスタイルもさることながら、福音主
義が可視的教会を否定することで、竟には不可視的共同体の意
識をも失わせ、人間の原子化をもたらした、とする Nestel の
現代的な批判に対する反論になつてゐるからでもあろう。つま
り、荒木教授の場合、思想史研究も、論述の持つ時代を超越し
た論理的透明さの背後で、現代の人間の運命に対する強烈な関
心に裏打ちされていた、と思われるのである。その点は、最初
の公刊業績であるプラムナッツ「政治理論の効用」に対する書
評において既に一きわ明らかであつた。

教授はそこで、先ず、当時隆盛となりつつあつた、科学とし
ての政治学の発達が哲学としての政治理論を無用ならしめる、
という主張に対するプラムナッツの反論を整理、紹介している。
プラムナッツによれば、価値判断の問題には政治科学ではなく
政治哲学が関わるしかないものであり、又、人間の根元的要求で
ある世界と自己との親和という条件を、特定の政治理論が満た
すか否かを判定するのは実践哲学の課題だ、というのである。
けれども更に、荒木教授はそれを敷衍して、政治理論の展開に
とつて必要とされる、新たな変化についての事実に知識を与え
る政治科学の可能性を論じ、その一例として、大衆社会に適合

的なシュンペーターの民主主義理論を揚げているのである。ここでは政治哲学と、大衆社会における人間の運命とを結びつけようとする教授の立場は明らかだと言つてよい。

こうした下地があつたればこそ、一九七〇年代に入つて始まる、実態調査、意識調査、選挙分析という、歴史研究を離れた現状分析をめざす新しい分野の開拓も可能だったのである。勿論指導教官の示唆乃至は指導ということがある、又政治学の新しい研究潮流を受容することで、圧倒的に思想史研究に傾斜していた当時の日本の政治学界の在り方を是正しようという狙いや覚悟もあつたであろうが、しかし、こうした新分野を自らの世界となし得たについては、最初から教授の中にあつた現代政治及び現代政治学に対する強い関心が与つて力あつたことは想像に難くない。かくして、荒木教授の独壇場がここから展開するわけである。具体例は、直接、遺稿集について御覧頂くこととし、ここでは、教授の仕事を通して見られる特徴として、大抵三つの点だけを指摘するに留めたい。

第一は研究対象の取り扱い方に窺われる特質である。教授の研究は意識調査にしろ投票行動分析にしろ、調査方法に限つてみれば、他の研究者と大きく異っているわけではない。調査の為にチームを組織し、動かす過程で膨大なエネルギーが費さ

れる点も同様であろう。しかし、収集されたデータに対して、これを徹底的に取り扱う、その徹底さにおいて教授の研究は他の迫随を許さぬものがあつた。データを微に入り細を穿つて眺め、検討し、能う限り様々な角度から分析を加えようとする、そこには一方に細心な目配りがあり、他方に、用語の吟味や使用される概念の再検討（例えば「保守化」を含む広い視野が存在しているのである。それだけではない。さらに、データを解析し、一定の結論へと導く推論の進め方が緻密にして着実であり、決して飛躍しない。にも拘らず鈍重な感じや冗長な印象を全く受けないのは、徹底して考え抜かれ、論理の骨格が明快だからである。その結果、荒木教授の諸論稿は、極めて高度な説得力に満ちている。この点は、どの一篇でも、直接に読んで頂ければ自ずと明かになる筈である。また、こうした特質は、緻密さと明快さを兼ね備えた教授の文体にまで骨肉化したと言つてよく、その点はトレヴァーローパー『宗教改革と社会変動』の翻訳や、わけでも、ストックウイン『現代日本の政治変動』の訳文にうかがうことができるのである。

二つ目は内容に関わる。詮ずるところ、荒木教授が終始関心を抱いていたのは、何が有権者（主として日本の）の投票行動に影響を与え、投票を決定させるのか、というテーマであつた

と言つてよく、そこから、投票者の社会的属性に関する諸研究、選挙にあつたての争点の効果、T・Vの影響、党首イメージの持つ意味、あるいは過去の政党に対する有権者の評価の影響 (retrospective vote)、¹⁾ さらには、政治組織との関連の有無と

選挙の時期とを重視する石川真澄仮説の実証的検討へと研究が次々と拡大・深化して行つたのである。そして、近年では、イングルハートの所謂「脱物質主義」(Postmaterialism)に代表される、現代世界に於ける文化変容の種々様々に迄研究関心を拡げていた。

ところで、その際、注意すべきなのは、投票に影響を与える諸要因を、能う限り実証的におさえて行くという学問姿勢の背後に、常にある種規範的なのが感得される点である。もとより、学者としての荒木教授はそれを前面におし出すことはしないし、冷徹な現実観察者としての教授は、議論においてしばしば我々の現実無視、羽化登仙を批判していた。にも拘らず、その政治意識や投票行動の分析の背後には一貫して、理想の、とは言わぬまでも、望ましい有権者像が尺度もしくは基準として存在していたし、もつと言えば、そうした全ての背後に、政治に対する教授なりのある種の理想像と言つたものが存在していたことは間違いない。そうした理念から発する現状に対する具

体的な批判を我々は度々耳にしている。荒木教授の政治学研究は、実証研究がその侷現状追隨になるような安直なものではなかつたのである。

そうした連関を端的に示すものが、教授が社会党に対して示し続けた強い関心にほかならない。若い一時期は知らず、筆者が相識するようになってからの荒木教授は反マルクス主義者であつた。巨大理論の持つ誇大妄想性、弁証法の胡散臭さ、必然性を強調する知的傲慢さ、そのいずれもが教授の絶対的肯じえないものだったからである。その荒木教授が、何故に、当時は未だ、マルクス主義どころか、レーニン主義が幅をきかせていた日本社会党の運命に深い関心をよせ、かつそれを終生持続したのか。政治科学が価値の問題を解決しないこと、そして「科学的」で流線型の実証主義が往々にして現状追認に陥りがちなこと、教授がプラムナッツ等の政治哲学研究を通してこのことを知悉していたことは言を俟たない。その観点から、いわばバランスをとる為に、現状批判の立場をとる少数野党を関心の的としたのであろうか。確かに、教授の多元主義に対する愛着、複数の努力や複数の議論の存在がよりよいものを産み出すという信念に着目すればそう言えぬことはない。しかし、それだけではあるまい。日々の議論において、教授は、時に「存在する

ものは合理的である」というヘーゲル右派的な保守主義の畧に
よることもあつたとは言え、全体としては、日本の政治の持つ
不公正さ、不合理、就中その具体的諸現象に対して批判的であ
つた。そうしてその責任は万年与党自民党に帰すべきものであ
り、その解決は政権交替以外にない、と考えていたのである。
勢い、社会党への関心も、何故政権を取ることができないのか、
という点に集中し、その為、時に極めて手厳しい社会党批判を
展開することにもなつたのであるが、いずれにしろ研究方法の
場合と異り、研究対象の選択においては、荒木教授は方法的自
覚に基づいた価値判断を一貫して行つていたと言つてよいであ
らう。

最後に自己の学問的方法の限界について荒木教授がどう考え
ていたか、という点に一言触れておく。我々の日常的経験だけ
からは理解できず、言語や概念によつて初めて認識できるよう
な法則や構造というものがある。そうした個々人の生活を越え
た大きな枠組を認識することが政治学を含む社会科学の重要な
役割なのであるが、荒木教授はそれに対しては当初懐疑的であ
つた。自己の学問を徹底して実証可能なものに限定しようとし
た教授の方法的態度の賜物でもあらうが、他方で、マルクス主
義批判の結果でもあつて、こちらの面から言えば、やや曩に懲

りてなますを吹くらいがなくてはなかつた。その限りで教授
の経験主義は幾らか狭いものだったと言えるかも知れない。け
れども、その後、社会学や言語哲学の研究を通じて、そうした
法則や構造が素朴実在論的マルクス主義者が考えたように「客
観的」に存在するのではなく、個人の役割や言語使用を媒介に
して、間主観的あるいは共同主観的に存在している、という考
え方は認めるようになっていた。そして、その結果、自己の研
究方法の限界と、同時にその真の有効性とを確信しつつあつた
ように見受けられる。鳥辭がましい言い方を許してもらえば、
荒木教授は学問的に円熟の境地に達しつつあつたのである。

二二

ところで、荒木俊夫という人物の魅力はどこにあつたのだろ
うか。少数の深い友人を持つ人は稀ではないし、浅く広く多く
の知己を持つ人も珍しくはない。しかし、親密な友人を沢山持
つ人物は減多にはいまい。荒木教授はそうした稀有の存在であ
つた。友誼に厚く、その上、律義さとユーモアの絶妙に混じり
合つた独特の人格が多くの人々を惹きつけたことは怪しむに足
りないが、荒木俊夫教授の魅力はそれに尽きるものではない。
何よりもはっきりと思ひ浮かぶのは、教授の公正さ、という

ことである。公正さを重視する、という教授の態度は殆ど人格の一部となつていたと言つてよく、広く見れば教授の学問研究の根幹をなしていたのであるが、直接に我々が感得し得たのは、様々な議論の仕方を通じてであつた。我々政治スタッフは、よく酒を飲みながら議論をし、時には、傍目に喧嘩としか思われぬ程激昂したこともあつた。にも拘らず、繰り返し議論を続けることが可能だつたのは、一つには教授の議論の展開が徹底して理詰めだつたからである。荒木教授が麻雀と囲碁を好み、かつ強かつたことは良く知られていよう。とりわけ後者については、理詰めでおして行く教授の議論の仕方と親近性があつたように思われる。法学部長時代に見せた、議論の結着のつけ方のみごときは、宛然囲碁の名局を見るようであつた。しかし、我々の激しい議論を可能にしたのは、それ以上に、荒木教授の議論の進め方の公正さ、フェアさであつた。揚げ足取りや弱点のみを衝く、という論法は、よく教授の採るところではなかつた。それどころか、教授が議論の中で噴るのは、相手の考え方に対してではなく、専ら、不公正な議論の進め方に対してだつたのである。こうした人格に根ざした公正さが、多くの人々の信頼を贏ち得たことは言うまでもあるまい。

荒木教授の人柄のもつ魅力を考える場合、その強さとやさし

さの類まれな結びつき、という特質を逸することはできない。やさしさについては、教授が子供と接している光景を一度でも見た経験のある人々には、改めて説明を要しないことであらう。同僚は勿論のこと、学生や院生、あるいは職員として、荒木教授と接してそのやさしさを感得しなかつた者は殆どない筈である。このやさしさが、友誼の厚さに連なる一方で、強さとも連続している。荒木教授の場合強さと言つてもマチスモ的なものとは無縁で、どんなことがあつても姿勢を崩さぬ頑固さ、あるいは少数派になつても動じない一貫性と言つた類のものである。精神の強靱さと言つた方がよいかも知れない。

ここ一年程の教授の生き方は、恐らく不治の病と知りつつ、それを強靱な精神力によつて、恰かも気付かぬ風で通してきた、というものではなかつたか。そうした教授の知らぬ振りが、我々まわりの人間をどれだけ楽にしてくれたかを考えれば、これこそが荒木俊夫教授における強さとやさしさの類をみない結びつきであつたことに、悲しむと無念さと共に、感謝の念を以つて、思い至るのである。

荒木俊夫教授経歴

平成 二年 一二月

北海道大学法学部長（平成四年一二月まで）

北海道大学評議員（平成四年一二月まで）

昭和 一二年 三月 二三日

北海道利尻島沓形に生まれる

昭和 三〇年 三月

北海道札幌西高等学校卒業

昭和 三四年 三月

北海道大学法学部法律学科卒業

昭和 三七年 三月

北海道大学大学院法学研究科修士課程終了

平成 五年 七月 二八日 死去

昭和 三七年 四月

北海道大学法学部助手

昭和 四〇年 四月

北海道大学法学部講師

昭和 四二年 四月

北海道大学法学部助教

昭和 五〇年 四月

北海道大学法学部教授

昭和 五三年 四月

北海道大学法学部教授

昭和 五九年 一〇月

日本政治学会理事（昭和六一年一〇月まで）

月まで）

昭和 六〇年 四月

大学入試センター教科専門委員会委員（昭和六一年三月まで）

北海道大学評議員（平成二年一二月まで）

昭和 六三年 一二月

北海道大学評議員（平成二年一二月まで）

まで）

荒木俊夫教授業績一覽

の対立と統合」(共訳)

木鐸社

Ⅲ 論文

I 著書

一九七五年

『大都市の革新票…札幌と仙台の場合』(小川晃一・阿部四郎・

蓮池穰との共著)

木鐸社

一九八三年

『投票行動における連続と変化…札幌市の場合』(相内俊一・

川人貞史との共著)

木鐸社

Ⅱ 訳書

一九七八年

H・R・トレヴァーローパー『宗教改革と社会変動』(共訳)

未来社

一九八三年

J・A・A・ストックウイン『現代日本の政治変動…繁栄の中

一九六六年

「カルヴァンの教会理論(1)」

北大法学論集一六卷四号

一九六七年

「カルヴァンの教会理論(2)」

北大法学論集一七卷三号

一九六九年

「北海道における四三年参議院選挙の分析(1)(2)」(小川晃一との共著)

北海学園大学法学研究四卷二号、五卷一号

一九七〇年

「一九六〇年代における林業地帯の社会党票」

北大法学論集二一巻一号

一九七一年

「札幌郊外地区(手稲)の政治意識調査(2)」(戦後手稲におけ

る「政治」(1))

北大法学論集二二巻四号

一九七二年

「札幌郊外地区(手稲)の政治意識調査(2)」(戦後手稲におけ

る「政治」(2))

北大法学論集二二巻四号

- 一九七三年
「昭和四十六年参議院議員選挙における札幌市住民の投票行動(1)」
北大法学論集二四卷一号、同卷二号
- 一九七四年
「一九七二年総選挙における共産党「票」・札幌市の事例」
北海道一区
「投票行動と社会的属性」
- 一九七六年
「林数量化理論第二類による投票行動の分析」
北海道一區
「投票行動と社会的属性」
- 一九七七年
「支持政党の変化と経済状態…イギリスの研究の紹介」
「法学政治学の課題」(北海道学術法学部十周年記念論文集)
日本評論社(一九七七年)所収
- 一九七八年
「総選挙における社会・共産両党の諸相…札幌市の事例」
北海道学術法学部十周年記念論文集
- 一九八〇年
「自民党得票率の変動…石川仮説の批判的検討」
北大法学論集四〇卷五・六号
- 「北海道における住民参加…共同調査研究報告」中の「研究の目的と調査項目の設定」(序章)「地域の特性…剣淵町」(第1部第5章)「開発論集」二一九
- 一九八二年
「投票に対するテレビ政見放送の影響…一九七九年・八〇年札幌調査を素材にして」
北大法学論集三三卷一号
- 一九八五年
「保守—革新次元と市民運動」
北大法学論集三六卷三三〇号
- 「ジュリスト増刊総合特集・選挙」三八
- 「J・プラムナッツ『政治理論の効用』北大法学論集一四卷一号」
- 「Roger Howell, Jr., Newcastle upon Tyne and the Puritan Re-」

volution (Oxford, 1967) : イギリス革命における地方史研究」

北海道大学法学研究四卷一号

V その他（北海道新聞における執筆等は除く）

一九八一年

『北海道大百科事典』北海道新聞社刊（一九八一年）中の項目
執筆

一九九一年

『戦後史大事典』三省堂刊（一九九一年）中の項目執筆